

乳児のインフルエンザ感染症

— 受診と入院 —

いずみ 泉 のぶ お 夫

キーワード：季節性インフルエンザ，乳児，確定診断，外来受診，入院

要 旨

島根県のインフルエンザの受診は乳児期前半では平均4%（最大10%），乳児後半のそれは10%（同21%），幼児は18%（同28~36%）と推計した。米国の確定診断例の調査では乳児前半の受診は人口の3~6%で6ヶ月~4歳の約半分であるが，入院は1,000人当たり2~7人で，2~4歳の0.04~0.6人より格段に多く，80歳以上の率に匹敵する。乳児は基礎疾患のない入院が多い。ICU治療の必要率は小さいが実数は多い。乳児期前半は不顕性・軽症感染が多い可能性があり，移行抗体の影響の究明を要する。乳児期前半は予防接種はできず，抗ウイルス剤投与も乳児期は原則できない。接触者の接種を励行する。妊婦の接種を勧告する国があるが，移行抗体により乳児をも防御する。インフルエンザによる入院と転帰の届出制が望まれる。

はじめに

新型インフルエンザが発生し問題になっている。その発生の探知も対策も，通常のインフルエンザ（以後，Flu）のサーベイランス（監視）や，対策のノウハウの蓄積が十分になされていてこそ可能になる。

乳児は原則として抗ウイルス剤の適応になく，6ヶ月未満児は予防接種もできない¹⁾。乳児のFluは高齢者に比べ死亡こそ少ないものの，入院

は匹敵する¹⁾。乳児のFluの監視や予防策は高齢者に劣らず力を入れる必要があり，その成果は新型Fluにも生かされるに相違ない。

Fluによる受診や入院，さらに死亡の地域や国における推計は，従来からFluの流行期の数値から，非流行期の数値を減じた，超過数として表され，多くの研究がなされてきた。

しかし，基準値を冬季のFlu非流行期とするか夏季とするかでも成績はかなり異なる。また，RSウイルスの流行期はFluのそれによく重なるが，影響は年少児ほど大きく，活動性にも年毎の差異がある²⁾。小児では他の呼吸器ウイルスの影響も大きく³⁾，超過法による推計は成人とは別格

Nobuo IZUMI

出雲市立総合医療センター小児科

連絡先：〒691-0003 出雲市灘分町613